

二〇二四年度 群馬大学共同教育学部 学校推薦型選抜問題
国語専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め三枚、解答用紙は一枚、下書用紙は一枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい（なお、出題の都合により、一部省略した）。

日本の社会は同調圧力が強く、空気を読むことが推奨される風潮が強い、とはよく指摘されるところだが、確かに、批判的検討が必要な場面でも、相互的な「甘え」や「お約束」がその場のコミュニケーションを覆ってしまうケースがあまりに多い。和を少しでも乱す言葉——批判（批評、吟味）的な要素のある言葉——に皆が敏感になり、その場のノリに合わない言葉を発しづらくなるケースだ。（中略）

まして、そうした同調の空気が支配するケースでは、相手の主張に対して明確に否定的な意見や疑問を向けることは強く憚られるようになる。言うなれば、互いになすき合う同調的な言葉の空間と、その空間全体に向けられる容赦のない厳しい言葉、その中間領域が存在しなくなるのだ。この種の状況がコミュニケーションの多くを占めてしまえば、「批判」の言葉はますます刺々しく、敵意をもったものとしてのみ機能するようになる。「批判」が相手への攻撃として捉えられがちな現状には、以上のような背景があるのではないだろうか。

同調と攻撃の間の中間領域が確保されにくく、「批判」という言葉が本来含んでいた「内容の吟味」、「物事に対する批評や判断」、「良し悪しや可否をめぐる議論と評価」といったものがおろそかになりがちな現状は、「炎上」という言葉の現在の用法にも通じているように思われる。

「炎上」はいま、各種のメディアで発信された誰か（特に有名人や公人）の言動に対して、ネット上で非難や誹謗中傷が殺到することを指す言葉ともなっている。問題は、当該の言動が筋の通ったものや正当なものであるうとも、逆に、筋の通らないものや不当なものであるうとも、どれも等しい並みに、「炎上」と呼ばれる、ということだ。ある差別を告発する勇氣ある発言をターゲットに、差別主義者たちが罵詈雑言を集中させることも「炎上」と呼ばれるし、とても看過できない醜い差別発言に対して、その問題を指摘する真つ当な声が多く寄せられることも、同様に「炎上」と呼ばれる。そして、何であれ炎上してフォロワーが増えて良かった、チャンネルの登録者数やオンラインサロンの会員が増えて良かった、ということも平然と言われたりする。そこでは、火の手の大きさや、それに伴う熱量の多さが、物事の真偽や正否や善悪に取って代わってしまっている。

マスメディアで頻繁に用いられている「賛否の声が上がっている」という類いの常套句も、問題になってくる事柄の内容をさしあたり度外視して、熱量の上昇のみに言及できる便利な言葉だ。どちらかの道理に明らかに分がある場合にも、また、賛否どちらかの声の方が圧倒的に優勢である場合にも、「賛否の声が……」と表現しておけば、旗色を鮮明にせず済むし、自分の言葉に責任を持つ必要もなくなる、というわけだ。

「炎上している」とか「賛否の声が上がっている」といった言葉によって物事をひとまとめに

してしまうのではなく、具体的な内容を「批判」する行為が、メディアでもそれ以外の場でも、もっと広範になされる必要がある。そして繰り返すならば、それは必ずしも否定的な行為だとは限らない。賛意を示すのであれ、あるいは難点を指摘するのであれ、人々がともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合っている場こそ、本来の意味で「批判」が行われている、建設的な議論の場なのである。

とはいえ、非難や攻撃とは違って、批判は決して簡単な行為ではなく、私自身も日々試行錯誤しているというのが実情だ。どうすれば的を射た批判を展開できるのかという以前に、相手との人間関係がネックになることも多い。というのも、批判をすれば、多少なりとも相手の気分を害したり傷つけたりすることは避けられないからである。だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか。

古田徹也(二〇二二)『いつもの言葉を哲学する』朝日選書八四五 一三五―一三八頁

問 「炎上」という言葉の現在の用法と、本来の意味の「批判」の違いを明らかにしたうえで、傍線部「批判は具体的にどう行うべきだろうか」という筆者の問に対するあなたの考えを述べなさい。(六〇〇字以内)